

【葬祭】第3章 無縁社会における墓と追悼

1. 「無縁社会における墓と追悼」第2年次中間報告書総括

山田慎也（国立歴史民俗博物館准教授）

鈴木岩弓（東北大学教授）

森謙二（茨城キリスト教大学教授）

村上興匡（大正大学教授）

小谷みどり（第一生命経済研究所主席研究員）

土居浩（ものづくり大学准教授）

問芝志保（筑波大学大学院博士課程）

1. 研究目的

現在、少子高齢化や核家族化による社会構造の変容によって、従来の家を基盤とした祖先祭祀が衰退し、その象徴となる墓の継承など、死後の祭祀が問題となっている。本研究では、死者の追悼行為がどのように変容したか、地域的多様性や歴史的な経緯に留意しつつ、多様な現状を把握し、現代日本の死生観を照射することを目的としており、あわせて今後の対応の可能性も考察するものである。本年度は2年目であり、それぞれの調査を継続して、課題を深化している。

2. 墓の無縁化とその影響

第一は家墓の継承が困難になり、無縁化の状況とそれによって生じる影響について、山田報告、森報告、土居報告がそれぞれ論じている。

山田報告では、過疎化による祖先祭祀の変容について、紀南地域の古座川流域地域の調査を進めた。昨年度は古座川上流の山間地域を取り上げたが、今年度は沿岸部漁村地域の古座地区の動態について把握した。古座地区ではある寺院の無住化によって離壇がすすみ、宗派の異なる寺院の合葬式共同墓への改葬が進んでいった。さらに男子の子孫がいても遠隔地の場合であったり、女性のみの子孫で実家の墓を改葬したりと、家観念が崩壊しつつある現代において、男系男子で嫁入り婚といった家的認識がむしろ祭祀の断絶に機能している皮肉な結果を生んでいることを指摘し、従来の墓が維持できていない状況を明らかにした。

森報告では、祖先祭祀といった道徳規範がなくなり、従来の墓地埋葬法の想定外の事態である散骨や合葬式共同墓など新たな葬法が、場合によっては死者の尊厳性を侵す可能性があることを指摘し、あらたな葬送秩序の構築の必要性を述べている。人は墓地などに葬られるべきで社会的に強制されるという、ドイツの公法概念である「埋葬強制」もしくは「埋葬義務」の発想は、とくに個人化が進む現在において、尊厳ある新たな葬送の構築に

寄与する可能性を主張している。

土居報告では、無縁墳墓に対する歴史的意識の変化を検討している。昨年度は、無縁墳墓の文化財的な価値から大正期に保存が進められていった点を指摘したが、今年度は明治期に無縁の墓が、古墳とともに保護の必要性が主張される背景を検討する。そこでは国家とくに天皇に対する「忠」を实践した人物の墓に関し、遺族がいなくなった後には国家がこれを保護すべきとの発想が生成され国会で議論されていたことを明らかにしており、「名墓」と呼称される墓の保存を巡るさまざまな実践を検討している。

3 無縁化とその対応

さらに墓が無縁化しないようにその対応としての共同墓があり、とくに近年、永代供養墓が急増している。それについて小谷報告、鈴木報告、問芝報告が論じている。

小谷報告では、新たな社会的紐帯が共同の納骨堂を持って祭祀を行っている実態を調査しており、今年度は生活協同組合による納骨堂とその祭祀について報告している。生協自身が経営許可を受け納骨堂を経営している事例や、納骨堂の祭祀だけでなく、契約者や遺族同士が親睦会を持つ事例など、血縁を超えた人々が死者祭祀を展開し、新たな紐帯を形成している点を指摘している。

鈴木報告では、日本で初の永代供養墓として設立された、比叡山延暦寺の久遠墓を調査し、埋蔵され供養される人数の違いによって多様な選択肢が設定され、利用者側の多様なニーズに対応しようとする霊園側の意図が反映されていると指摘している。さらに歴史を持つ宗派の総本山が直接的に霊園を運営し、個別の墓のまま祭祀を行おうとする点が、一定期間後合葬を前提とする他の永代供養墓とは異なっており、これは総本山という特性によって永続性が担保されている点に特徴があるという。

問芝報告では、北海道札幌市を事例として、無縁者を対象とした墓と祭祀の調査を行った。札幌は近代になって開発された都市であり、当時の近代化の発想が直接的に表出している地域であるので事例に適しているという。札幌では、開拓当初は人口の流動性が大きく無縁墓が増加していった。一方墓地は次第に郊外化、大型化、集約化されていくようになっていった。現在、無縁死者は平岸霊園の「納骨塚」に合葬されるが、近年、この納骨塚は身寄りのある人も利用するようになり、納骨塚の増設が行われた。さらに、市自体が主体としては祭祀を行わないものの、社会福祉協議会によって毎年8月、市内寺院において行旅死亡人の遺骨が供養されるという。ただし、ここには市民は参列せず行政関係者のみであり、余り認知されていないという。

今年度も以上のように、家による祖先祭祀が維持できなくなっていく状況を歴史的、地域的に明らかにし、さまざまな現代的な対応について調査を進めていった。その模索する姿の分析を通して、追悼のあり方や紐帯の形成など、さまざまな課題が表出しており、それを丁寧に解決していく必要があることがわかる。